日本農民新聞
(5)　2015年7月5日

蔦谷栄一の異見私見

反原発から脱原発へ

山口県の瀬戸内海にある上関町の長島に、原子力発電所を建設する計画が出されて32年が経過するが、建設予定地である長島の田ノ浦と海を挟んで対岸に浮かぶ祝島では今日に至るまで建設反対運動が展開されている。纐纈あや監督による映画「祝（ほうり）の島」や鎌仲ひとみ監督による「ミツバチの羽音と地球の回転」で描かれているように、島は原発建設推進派と反対派の住民に二分しながらも、反対運動が継続されてきた。毎週月曜朝に行われるデモ行進や、現場への建設資材の搬入等の動きに対して、船に乗ってまさに体を張っての抗議行動により搬入を阻止する様が映画では映し出されている。反対運動の基本にあるのは「お金ではなく、この海を守れ」という思いであり、さらにその背景には豊かな海がもたらしてくれた半農半漁の生活への確かな信頼がある。

この6月、7年ぶりに祝島へ足を運んでみた。相変わらず高齢化は著しいが、赤ちゃんや子どもも含めて若い人の数がこの数年で増えていることに驚かされた。とはいえ移住してくる数以上に高齢化がすすんでいることから、平均年齢を引き下げるまでには至っていないが、島のところどころでおばあちゃんがお母さんに抱かれた赤ちゃんをあやしている姿を見かけるとともに、移住者が起業して開いた食堂やカフェが4軒もあるなど、島の雰囲気は大きく変化しつつある。

これにともなって反原発運動も以前とは変わってきたという。これまで島の住民は、Aは推進派、Bは反対派と色分けして見られていたものが、移住者にとって住民のこれまでの経過等については深く知る由もなく、人を色分けしてみることがない。また移住してきた若者を中心に〝なんでも屋・祝島わっしょい〟が発足し、ここで山仕事、草刈り、掃除、お墓の手入れ等、雑用を何でも時給700円で何でも請け負うことを始めたが、いろいろの人からのたいていのニーズには対応していることで、島の人間関係が次第にフラットとなり、推進派と反対派の間にあった壁を低くする効果を発揮しているそうだ。

またUターンしてきた氏本長一さんが、水田での養豚や竹藪等での牛の放牧を開始して10年になる。各家庭から出される食品残渣を収集・分別し再利用することによってエサを自給するとともに、豚や牛の〝舌刈り〟により耕作放棄地が水田や畑として復活し、棚田のために築かれた石垣を含めて見事な景観がよみがえっている。

このように祝島は島の中での循環を着実に膨らませつつある。若者が高齢者の仕事を代行することによってマネーを島内で循環させ、食品残渣の再利用と放牧により畜産・農業と食の循環をつくり出している。外部からの若者を受け入れ、放牧を導入しての、あらたな自給圏の創出である。反原発を叫ぶだけでなく、原発を必要としない足元からの経済と暮らしの見直し。次の世代に引き継ぐべきは一時の金ではなく、自然とこれを活かしての循環システム。祝島の取組は日本の国のありように貴重かつ重大な示唆を与えている。

（農的社会デザイン研究所代表）